

教育目標	自他敬愛に基づく協調の精神に富んだ心豊かな人間性を育成するとともに、自ら定めた目標に向かって意欲的に取り組む態度を育てる。		総合評価
運営方針	日々の学習活動を大切に生徒の進路実現を目指すとともに、学校行事や部活動を通して「知・徳・体」のバランスのとれた生徒を育成する。		
平成30年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標	4
学校行事の企画進行において、生徒を主人公にした取組は、周囲からも高い評価を受け、もはや、本校教育の特徴の一つとして定着してきた。今後も、いろいろな機会において、生徒の持つ潜在能力を引き出すため、積極的に登用していきたい。来年度からの学校国際化に向け、本年度から、授業改善や評価等について、各教科はもちろん学校全体の運営について、そのことを意識して取り組む必要がある。その為に「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の展開や、その実現に向けた、教員の授業力のさらなる向上を目指したい。また、国際化に対応する教員の資質向上を意識した研修を実施するなど、一層の組織力強化に向けて取り組みたい。	キャリア教育の推進	・学校教育のあらゆる活動を通して、将来のビジョンを描くことができるように進路指導を充実させる。 ・規範意識を高め、信頼される人間の育成を図り、コミュニケーション能力を向上させる取組を推進する。	
	学習意欲と学力の向上 自立した学習習慣の確立	・できるだけ早く進路目標を設定させ、目標達成のためにHRや個人面談を充実させる。 ・基礎基本を大切に、論理的思考力・表現力・判断力を育成するために授業改善や工夫を図る。	
	グローバル人材育成(国際理解)の推進	・郷土の歴史や風土を知り、郷土を愛する精神を育成する。 ・来年度より国際高校に移行することを念頭に、グローバルなコミュニケーション能力を高めるために、英語教育を充実するだけに止まらず、全教科においてそのことを意識し工夫された内容を展開する。	
	地域との連携	・本校教育活動に対する地域住民の理解を得るための取組を推し進めるとともに、地域の持つ教育力を積極的に取り入れる。 ・開かれた学校としてあらゆる機会を利用して情報を発信する。 ・コミュニティスクール化に向けた取組に着手する。	
	学校の組織力の強化と教育力の向上	・目標達成状況や課題の共有化・焦点化を図り、解決に向けた方策を探る。 ・「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善を積極的に図る。 ・学校評価を活用し、外部評価を念頭に置いた改善を図る。 ・教育相談体制の構築による生徒支援体制をさらに強化する。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価 (4段階の数値)		成果と課題	改善方法	学校関係者評価							
第1学年	生徒全員が充実感、達成感を得られる環境づくり	生徒・教員全員が集団意識を持って取り組む。	4	4	(成果)個々の生徒の持つ課題を共有して、それぞれの生徒に適した支援を粘り強く行うことができた。 (課題)個々の生徒をとりまく状況が複雑になるとともに、問題を抱える生徒の数も増え、正確な情報共有を行うには時間がかかることがあった。スムーズに個々の生徒の状況を把握できるようなシステムを確立していく必要がある。	学年会議などでの情報交換はもとより、校務系でのデータ共有や、スクールウェアでの情報共有などを積極的に行う。								
		円滑な情報伝達と共有、協力(報告・連絡・相談)を行う。	4											
	登美高生としての自覚を持たせる指導	基本的生活習慣(遅刻・欠席・提出物等)を身につけさせる。	4	3				(成果)基本的生活習慣の大切さについては、日々の生活の中や学年集会で指導してきた。生活リズムを崩した生徒には、家庭とも連携して改善させることができた。 (課題)当初、80パーセントを超えていた部活動加入率が、1月現在77.7パーセントとなった。部活動をやめてから目標を持っていない生徒に、働きかける必要がある。	家庭への連絡を密にして、家庭と情報・指導方針の共有を強める。また、部活動を辞めた生徒に関しては、生徒会活動や家庭クラブ活動への参加を促す。					
		挨拶を励行する。	3											
自主的な取り組みを通じた進路目標の設定	部活動への積極的参加を促し、加入率80パーセント以上を目指す。	3	4	(成果)CTの時間を有効に活用して英語・国語の学習を行うとともに、計画的な進路HRが展開できた。 (課題)目的意識を持って、自主的に学習する力が弱い。	あらゆる教育活動を通じて、自身の将来像を具体的に考えさせる。									
	具体的な将来或いは進路の目標が設定できるように導く。	3												
第2学年	生徒が不安なく学校生活を送れる環境づくり	欠席・遅刻生徒への対応を丁寧に行い、常に状況把握に努める。	3				4	(成果)不登校傾向の生徒や学校生活に不安を抱える生徒に対して、丁寧な対応ができた。 (課題)部活動や進路についてなど、2年生としての悩みを抱える生徒がいる。早期発見による対応が求められる。	家庭と連絡を取り合って、細やかに指導する。	①登美ヶ丘高校が今まで培ってこられた伝統や文化をどのようにつぎつぎ残していくかを、残りの2年間でしっかりと考えていってほしい。 ②学校と警察が一体となって生徒の安全を守っていくべきであり、何か気になることがあれば早期にご相談いただきたい。特に、大麻や特殊詐欺などの事件に関わる高校生の事案が発生しており、学習連絡も十分活用しながら生徒への指導や注意喚起に努めてもらいたい。 ③授業参観の折、生徒の大きな鞆が教室内の床上にあり、少し手狭に感じられた。学習環境向上の観点からも、ロッカーの設置等について一考されてはいかがでしょうか。 ④自転車通学生の安全確保のため、生徒が利用する通学路にカーブミラーを設置していただいた。 ⑤国際高校との併置によって、今まで以上に教職員の業務やご苦労が多くなると思われるが、今後とも引き続き登美高生の指導をよろしく願っていたい。 ⑥国際高校との連携については、育友会も前向きに考えており、しっかりと連携を図りながら活動を進めていきたい。				
		円滑な情報の伝達と共有、協力(報告・連絡・相談)に努める。	4											
	第2学年としての立ち位置を意識した学校生活の指導	基本的生活習慣や規範意識を大切に、先輩の見本となる行動(登美高生としての自覚ある行動)がとれるように導く。	3	3	(成果)学校行事(文化祭・修学旅行・総合的な学習の時間など)の、節目節目でクラス・学年としてのまとまりが出てきた。自分の役割を責任を持って果たそうとする行動が見られた。 (課題)仲のよいグループ内での行動が優先することがある。周囲との関係を考えて行動することが求められる。	基本的生活習慣と規範意識の確立には、粘り強い指導を続ける。3年生でのより良い進路実現に向けて、保護者の思いも確認しながら進路に関わる情報を適切に伝えていく。学校生活を充実させて、後輩から信頼される学年となるように指導する。学校行事に向けての研修を充実させる。								
		学校行事、部活動、学級活動への参加を周囲との関係を整えながら積極的に行っていく姿勢を身につけさせる。	3											
		総合的な学習の時間を通して、責任ある取組と協力して活動する姿勢を育てるとともに、進路選択の参考になるように取り組ませる。	3											
	自主的な取組を通じた進路目標の設定	毎日の家庭学習確保のために、課題の出し方を工夫する。	3	3							(成果)CTを計画的に行い課題設定することで、家庭での学習につながる面があった。大学説明会に積極的に参加し、進路に向けて研究する姿が見られた。 (課題)与えられた課題には取り組んでいるが、自主的な学習が不足していると考えられる。進路目標の設定が低い生徒がいる。	生徒が自分の可能性を信じ、自分を伸ばしていこうとする進路指導を行う。クラス・学年でともに過ごす他者を思いやり、しんどいときには互いに支え励まし合える雰囲気をつくる。		
具体的な将来或いは進路の目標が設定できるように導く。		3												
第3学年	健康的で規律正しい学校生活を通じた自立心の育成	生徒の家庭状況および家庭生活の把握に努め、個々に応じた指導を行う。家庭との連絡を密にし欠席・遅刻が年間を通して5回を超えないよう指導を行う。	3	4				(成果)生徒個々に応じて必要な対応を行った。 (課題)1,2年次より欠席、遅刻の多い傾向にあった生徒の改善があまり見られなかった。また、それ以外の生徒においても、進路の迷いや体調不良などで昨年度よりも増加した。	家庭と連絡を密にとり、信頼関係を築きながら細やかに指導を続ける。					
		CT(朝の自主的な学習の時間)と「総合的な学習の時間」を活用して、進路についてしっかりと考えさせる。実力養成講座を充実させ、講座満足度が80%以上の魅力ある講座を目指す。	4											
	将来像を見据えた進路目標を的確に定め、チャレンジ精神を持ち最後まで頑張り抜く生徒の育成	進路実現のための、基礎学力と応用力を身につけ、集中して学習に取り組めるように指導する。自習室の指導体制を徹底させる。	4		4	(成果)CTや実力養成講座への取り組み、自習室の利用は効果的であった。 (課題)家庭学習の計画性に問題があり、学校生活のリズムをうまく整えられない生徒が多く見られた。	3年間を通し計画的な学習習慣と生活リズムの確立を伝えていく。							
		学校行事に積極的に取り組ませ、3年生としての自覚を持ち、責任を果たす大切さ、協力する素晴らしさを体得させる。	4											
連帯感・協調性や他者と支え合える社会性をもった生徒の育成	部活動に引退まで取り組ませ、達成感の中での人間的成長を促す。	4	4	(成果)やるべきことに対しては、みんな真面目に一生懸命取り組むことができていた。 (課題)級友との関係性の中で、上手くバランスがとれずクラス全体での活動に対する協力体制が薄い。	学校生活および級友との関係性の大切さを引き続き伝えていく。									
	さまざまな学校生活の中で互いの違いや個性を認め合いながら、進路実現に向けてクラス全体で努力できる仲間づくりを努める。	3												

総務 企画部	生徒主体の式典の充実と 教職員の指導力向上	厳粛で温かみのある生徒主体の入学式・卒業式および着任式・離任式、規律のある始業式・終業式・修了式を企画運営する。	4	4		(成果) ・生徒が司会する入学式・着任式は厳粛さと温かさをもち、本校の特色となっている。また始業式等は学期の節目にふさわしい規律ある形で実施できた。 ・学校評価表が簡潔なものになり、取組のポイントが明確化し教育活動の点検も確実にできた。 ・保護者アンケートの回収率が前年より高まった。アンケートの結果から学校の活動へのプラス評価がほぼ90%に達した。 (課題) ・入学式等の式典の運営は国際高校と調整しながら改善していく。	国際高校の目標とビジョンとを合わせ評価計画を改善し、式典やアンケートの内容・取組方法を再考していく。行事について、国際高校と連携し、他分掌や関係機関とも連携を密にして学校の活性化をはかっていく。
		学校評価計画表を作成し総括会議を実施することで、本校の教育活動を点検し、教職員の指導力向上を目指す。	4				
		授業公開および各種アンケートを実施し、保護者・生徒・外部関係者等の本校への評価を明らかにし、結果を教育活動に反映させる。	4				
育友会・各種団体・同窓会との連携強化	育友会・各種団体との円滑で緊密な連携と協力体制を築く。育友会活動への保護者の積極的な参加を働きかけ、組織の活性化を図る。	4	4		(成果) ・育友会活動への保護者の積極的な理解と協力で会議・行事への参加状況が大変良好であった。大学訪問は参加者が多くバス2台で実施、バザーの売り上げは前年を上回った。 ・同窓会総会は参加者が100名を超え盛況であった。 (課題) ・国際高校との連携・調整を確実にしていく必要がある。	育友会・同窓会・後援会等の各種団体が培ってきた伝統と実績を大切にしながら、国際高校との連携・協力体制を確実にすすめていく。	
		定期的な監事会を実施し、監事間の連携で同窓会活動の活性化を図る。登美ヶ丘高校として記念となる同窓会総会を企画運営する。					3
広報活動の改善と充実	学校案内誌『碧き風』を大改訂し、登美ヶ丘高校として最終の「学校案内」を作成する。学校ホームページの積極的な活用を通じて、本校からの情報発信と広報活動を推進する。	4	4		(成果) ・今年製作した新しい学校案内『我登美高』は『碧き風』を受け継ぎ、活気のある生徒の様子が伝わる内容となり大いに活用している。 ・ホームページは充実した内容で発信回数も増加し、タイムリーに広報・案内・連絡に活用できた。	ホームページ等を活用し、登美ヶ丘高校・国際高校の広報のアピールを積極的に行う。	
教務部	学力向上を目指した「主体的・対話的で深い学び」の推進	アクティブ・ラーニングの形態を取り入れた授業をすべての教科で実施するとともに、国際化に対応し教員の資質向上を意識した研究授業や研修機会の充実を図り、生徒の学力向上を図る。	4	4		(成果) 生徒の対話的な形態を取り入れた、主体的な学びを推進する授業の公開を学期に2回実施し、学びの意欲を高める授業のあり方を共有できた。 (課題) 今年度導入された校務支援システムの活用をさらに推進し、国際高校のカリキュラムとの共存という視点から観点別評価についてさらに研究を進めていく必要がある。	校務支援システムの研修を年2回実施するとともに、国際高校が目指す探究型の授業像を探る。
		シラバスを活用した観点別評価をすべての教科で推進し、生徒一人一人に応じた手立てを探究するとともに実態に応じた授業改善を図り、生徒の学習意欲を高める。	3				
	総合的な学習の時間「倭」における国際理解教育の充実	教員間の連携を密に行い、培うべき力の共通理解を図ることで、PDCAサイクルを効果的に機能させ、生徒のコミュニケーション・プレゼンテーション能力を高める。	3	3	4	(成果) 大学教授や地域の方に外部講師として指導いただいたり、情報室や第2情報室などを活用して、生徒の主体的な調べ学習を促進できた。 (課題) 新学習指導要領の「総合的な探究の時間」の導入に伴う「探究」活動のあり方を研究するとともに、国際高校との共存を模索していく必要がある。	「グローバル人材の育成」という本校の教育目標に沿った指導のあり方や年間計画を具体化し、探究活動充実のための条件整備や職員研修の充実にも努める。
		グローバル人材の育成を目指して、地域の方々等外部講師の招聘や教材の厳選を図り、生徒の探究的な活動を活性化し、生徒の国際理解への関心・意欲を高める。	3				
	授業時間の確保と少人数授業の推進	時間割の変更や考査前の授業調整を円滑に行い、各教科間においてバランスのとれた授業時間を確保する。	4	4		(成果) 考査前、早めに授業時間の調整を実施し、ある程度授業時間を確保することができた。 (課題) 本校と国際高校との教育課程、校時が全く異なるため、使用教室や時間割調整について研究する必要がある。	国際高校の担当者との連携を深め、特に学際科目を中心とした少人数授業の1年後の姿をイメージし、本校のカリキュラムとの共存を図るための有効な手段や教室共用のあり方をシミュレーションする。
「グローバル・イングリッシュ」等の少人数授業の特性を生かすとともに、特別教室の活用を工夫して、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を推進する。		3					
生徒 指導部	基本的な生活習慣の確立とマナーの向上	遅刻を最小限におさえ、年間全学年1.5%未満を目標とする。	3	3		(成果) ・教員の協力により、昇降口指導や通学路指導を継続して行うことが出来た。今後も教員の共通理解のもと、安全指導・マナー指導を継続していきたい。 ・自転車集会における安全指導・マナー指導を行った。また自転車点検において安全点検の必要な生徒に対し、指導を行うことが出来た。今後も継続して取り組みたい。 ・クラスごとに目を付けて、生徒会役員と生活委員が正門において挨拶運動を行っていった。今後も国際高校と連携して継続して取り組みたい。 (課題) ・2学期は遅刻が増え、啓発する機会が増えた。今後は「なぜ遅刻がいけないのか」の意識付けを行い、「時間を大切に」との啓発に取り組む。 ・全校朝会や各クラスでのSHR・LHRにおいて、生徒に対する有効な指導・助言を充実させるために、準備を怠らないよう努める。	正しい生活習慣を身につけさせるために、集会やSHRを通じて根気強く継続的に啓発していく必要がある。特に毎日の授業やSHRにおける取り組みの継続が徐々に生徒に浸透していくと思われる。生徒、教員ともに「日々の積み重ね」が必要であると考え、「ともに理解、ともに実行、ともに成長」を心掛け、「ともに歩む」を共有したい。
		学期に一回の全校集会と毎日ショートホームルームでの指導を行う。	3				
		週3回の昇降口指導、週1回の中登美ヶ丘3丁目と6丁目の通学路指導を行う。	4				
		1学期に1回の自転車集会、年間に1回の自転車点検を行う。	3				
	『生徒が、瞳を輝かせ、胸を張って、笑顔で登下校』を目標とした生徒理解を含めた生徒指導	特別支援を必要とする生徒の支援と、関係分掌との連携を密にし、明るく健全な生徒の育成に努める。	3	3		(成果) ・アンケートを通じて共有した情報に対し、タイムリーに生徒・保護者と向き合い問題解決に向けて効果的に連携して取り組むことが出来た。今後も継続して取り組むことに努める。 ・学校生活のいろいろな場面において、生徒・教員がお互い積極的に挨拶を行い、明るい雰囲気作りに向け取り組むことが出来た。今後も国際高校の生徒とも一緒に、挨拶の大事さを共有していきたい。 (課題) ・人権教育部との連携において、日々の生活における「他人を思いやる心」の啓発に取り組む。成果を上げたい。 ・支援を必要とする生徒に対して、学年主任者会、支援委員会、学年会議、職員会議等を通じて情報交換・情報共有を行い、対象生徒や保護者に継続的に有効な手立てを講じられるよう努める。	速やかな情報共有と協力体制の確立を目指し、時期を逃さず効果的に生徒・保護者に支援できるよう取り組むことが重要である。そのために生徒からの相談に真摯に向き合うことはもちろんのこと、口頭から生徒の表情や様子を観察し、少しの変化にも気づき、「声掛け」や「情報共有」が出来ようよう努める必要がある。
アンケート「教えてください」を活用し、「いじめ等」のアンケートを基に個々の生徒理解に努める。		3					
職員と生徒が自然に挨拶をかわす、明るい校風をより一層推進する。		3					
学校行事、部活動の活性化	学校行事において生徒会役員及びオリター(学校行事を運営する生徒)との連携を密にし、その充実を図る。	4	3		(成果) ・例年通り、「交通安全マスコット配布運動」「挨拶運動」など、生徒会、家庭クラブ及び奈良西署と連携して取り組むことが出来た。 ・生活委員・体育委員等と協力し、受付業務などに円滑に取り組むことが出来た。今後はさらに効率的に取り組めるよう努めたい。	従来取組に加え、生徒からの発案も取り入れ、より充実した学校行事となるようさらに連携を強め、活性化に努める。	
	文化祭実行委員会の活動を補佐し、その充実と活性化を図る。	3					
進路 指導部	向上心を持って、粘り強く努力した生徒が希望の結果につながるようなサポート体制の確立	生徒個々に対しては、校外模試を利用した動機付けを行い、スケジュールに基づく学習に取り組ませる。	3	3		(成果) ・模擬テストの受験数は例年同様最後まで多かった。さらに過去問に目を通してからの受験し、受験後は熱心に復習する生徒が多かった。 ・センター試験の出願者数181名、受験者数126名は昨年度を上回った。1月18日まで受験対策を一通り成し遂げるといった雰囲気も醸成された。 (課題) ・将来、どのような形で社会に貢献したいか、大学で何が学びたいかという具体的な気持ちがいまだに希薄。そのため進路実現へのスタートが遅れている。 ・また、志望の軸がぶれてしまい、しっかりとした志望理由書を書けない傾向がある。	総合的な学習の時間、総合的な探求の時間なども連携を取り、自分がいかなる世界で活躍しようと思っているのかを記述する時間を設定したい。
		集会・面談等を通じた意識付けを行うとともに、キャリア設計に対する理解を深めさせる。	3				
	生徒が自主的に学習に取り組める指導体制の充実	実力養成講座を通して、目的意識を持って自主的に学習する態度を養う。	4	4		(成果) 早期に生徒に実施を知らせることができ、多くの生徒が参加することに繋がった。最後まで出席する生徒が増えた。 (課題) 実力養成講座の内容を、継続的に家庭学習にもつなげる必要がある。	学期ごとに実力養成講座による家庭学習時間の調査を行い、担当者に連絡する。
		保護者対象の進路説明会を行い、進路・就職に対する理解を深めてもらう。	4				
		配布物を通じて、保護者に情報を提供する。	4				
様々な情報・データ共有による教員間の共通理解の促進	各種の情報提供を行い、研修会を実施するなど、本校の実態と大学受験の現実に対する共通理解を深める。	4	4		(成果) 大学入学共通テストにおける外部検定・記述問題などについて、研究調査したことをまとめ、多方面に発表することができた。 (課題) 社会の変化を読み切れず、多くが徒労と帰した。マーク方式での変化はまだ研究しなければならない。	今後とも大学入試センター、予備校などの研究会に出席し、情報収集に努める。	
	予備校や大学主催の研究会や説明会の案内をし、研修への参加を促す。	4					

人権教育部	さまざまな人権問題を自らの課題と考え、周囲のなかまど力を合わせて解決していく生徒の育成	3年間を見通した人権ホームルーム活動の年間計画に沿った取組を推進するために、指導案の作成や資料等の収集に努める。	3	4	4	(成果) 概ね年間計画に沿って人権ホームルームを実施した。「人権をたしかめあう日」を中心に、高校生の人権作文を資料とした取組を各クラスで展開した。1学期に生徒指導部と連携して講演会を実施した。校内人権作文集を発行し、各クラスで展開した。 (課題) 人権問題と自己との関わりについて考えを深めさせ、十分作文に反映できていない。HRの事後のまとめが整理されていないため、次学年への引き継ぎがなされない。また、多くの先生方が多忙のため研修の機会を奪われている。	事前研修で、HRで留意すべきポイントについてわかりやすく提示する。人権問題を深く考える糸口を見いだせるような講演・研修内容を計画するとともに、人権作文の指導等を工夫する。学期毎にHRの集約を行う。		
		他の分掌と連携しながら、多角的に人権問題にアプローチできるような工夫を行う。	4						
		人権について発信する機会を月1回設けて、人権問題を日常的に考えられるように努める。	4						
	他者との個性のちがいをよく理解し、共に社会生活を送ることのできる生徒の育成	ろう学校との交流会を複数回実施することにより、社会における共生の在り方について考える機会とする。	4					(成果) ろう学校との交流会を2回実施することができた。 (課題) 交流に関連して、生徒に人権問題についての考えを深めさせる点が十分とはいえない。	参加生徒に事後のふりかえりを行う機会を確保するとともに、交流の成果を校内に広報するよう務める。
健康教育部	健康的で安定した学校生活を送れる生徒の育成	各種検診等の結果を踏まえ、自ら健康的に生活できるような態度を身につけさせる。	4	3	4	(成果) 定期健康診断を円滑に実施することができた。 (課題) 時間的にも厳しいスケジュールの中でさらに円滑に、効率的に実施できる方法を考えていきたい。 ・生徒の健康問題も多様化してきており、関係各所と連携し、様々な機会を通じて啓発活動を行う。	・保健調査票(問診票)の改善や有効活用を再考する。 ・健康診断の日程を抜本的に改革する(健診日を設ける等)。 ・生徒会活動や教育相談室等とタイアップして啓発活動を実施していく。		
		医療勧告書などにより生涯にわたって健康的に生活していける態度を涵養する。	3						
		掲示物などを用い、健康に対する啓発活動を展開する。	3						
	運動・食と健康の関連性の理解の深化	体育行事を通して運動と健康との関わりや必要性を理解させる。	4	4		4	(成果) 体育大会においては体育委員会の要望を受け、種目の一部改訂し盛り上がった。 ・救急法講習を行い、教科書の枠を超え知識を身に付けた。3年生までの一部の生徒であるが救急体制が整いつつある。 ・食生活通信を年2回発行した。 (課題) 今後分掌新体制での役割について検討の必要がある。	体育行事については新しい学校との連携を図りながら進めていくことが必要となる。 食育について内容を充実させていき、全体に広めていくやり方を検討する。	
		体育行事や部活動を通して一体感や愛校心を育成する。	4						
		食習慣の実情把握を行い、正しい食習慣を実践できるような態度を育てる。	3						
	学校内・外の環境美化に努める意識の醸成	自主的に校内外の環境美化活動を推進できる態度を育成する。	4	4		4	(成果) 防災訓練では、奈良シェイクアウトの趣旨を指導し、啓発活動を行った。文化祭などの行事における美化活動を美化委員が中心となり推進した。 (課題) ゴミ出しの分別には、まだまだ課題が残る。	ごみの分別・リサイクル活動について、その大切さを校内のみならず、社会全体の環境問題として取り上げていきたい。	
		校内外において分別収集などを推進し、生涯にわたる循環型社会を担うことを理解させる。	3						
購買の利用やマナーの向上のための啓発をする。		4							
文化図書部	読書習慣の確立	各教科・各分掌との連携を図り、蔵書の充実を行い、年間貸し出し冊数200冊以上をめざす。	4	4	4	(成果) 貸し出し冊数2000冊以上という目標は達成できた。また、図書委員会も毎学期実施し、広報活動を充実させることもできた。 (課題) 一部の生徒に本の貸し出しが偏る傾向にあるため、もっと多くの生徒が読書に関心をもち、本を借りてくれるように啓発していくことが必要である。	ビブリオバトルやCTの時間を用いた朝の読書など、多くの生徒が参加する行事を通して、これまで以上に本の魅力や読書することの楽しさを伝えていけるような工夫をする。		
		図書委員会を学期毎に開催し、広報活動を充実させる。	4						
	文化・芸術・伝統への理解推進	文化鑑賞会を年1回開催し、文化に対する意識を高める。	4			4	4	(成果) 文化鑑賞会、文化講座、百人一首カルタ大会を開催し、生徒が数多く文化に触れる機会を確保し、文化的な関心を高めることができた。 (課題) 文化委員・図書委員以外で文化講座に参加する生徒が少なかった。啓発活動を更に充実させ、積極的に参加してくれる生徒を増やす必要がある。	生徒達が学校の文化的諸行事に、これまで以上に主体的かつ積極的に参加できるようにするため、ワークショップ型の行事形態を新たに企画・導入する。
		文化講座を年2回実施し、日本を含め世界各地の文化に対する関心を高める。	4						
		百人一首カルタ大会を開催し、日本の古典文化への関心と理解を深める。	4						
	文化委員会を学期毎に開催し、文化祭や文化講座などの充実を努める。	4							
生徒会指導部	他分掌と連携した生徒主役の生徒会活動の実施並びにアクティブ・ラーニングで培われたプレゼンテーション能力の深化	各専門委員会が各学期に1回以上独自の取り組みを行い、生徒会本部と連携を行う。	4	4	4	(成果) 各委員会独自の取り組みを実施できた。オリター及びフレッシュマンミーティングに対する満足度は達成した。 (課題) 日々の集会を通して、生徒が一体感が得られる取組を考える。	特に来年度は、2つの学校が併設する中で、全体指導をする際に、生徒同士が自分たち以外の活動を理解し応援し合える場を設定する。		
		フレッシュマンミーティング(入学前説明会)での新入生および本校オリター参加者の満足度を80%以上に上げる。	4						
		キャプテン会議・部活動集会以規律面だけでなく、母校愛を育てるために校歌斉唱や部活動の効用などを共有する時間を持つ。	3						
	「地域とともにある学校づくり」の双方方向での発信	地域の教育機関を通じ、登美ヶ丘地域と連携する行事を各分掌・教科とも連携して3回以上行い、地域社会の構成員として感謝の気持ちを持たせる。	4	(成果) 多機能複合型介護施設との連携をはかれた。 小中高合同挨拶運動は、地域の方々からの好意的なご意見をいただいた。 (課題) 高校生が地域活動へ参画し、地域の構成員として自信が持てる機会を考える。	地域の小中で、本校生ができる役割や活躍のできることを連絡を取り合う。				
国際教育部	異文化に触れ、違う価値観を享受し、他者を尊敬できる姿勢の涵養	国際理解について体系的に学べるよう資料の整理、教材の作成を行う。	3	3	4	(成果) 検定試験・語学研修・海外団体受入・国際交流通信等、資料の整理を行った。 (課題) 来年度から新しい取組が始まるので、マニュアルの作成等、順次具体的な計画を立てていきたい。	これまでの教材や指導案の整理、研修等で得た新しい情報や教材は、共有できるよう工夫する。		
		国際理解係(委員)の活動を活性化し、何ができるか可能性を探る。	3						
	語学研修、海外留学制度や海外派遣、留学生の受入等による広い視野をもった人材の育成	語学研修をはじめとする、海外研修や長短期留学に参加する生徒を増やす。	4	4		4	(成果) 語学研修の事前研修については複数回実施し、充実したものとなった。また、留学説明会等の案内及び、参加を通して長期留学に参加する生徒ができた。 (課題) 語学研修については従来通り実施し、長短期の留学については今後も案内方法を工夫し、啓発していく。	留学については情報の提供を徹底することと、専門団体の協力を得た説明会の実施も試みる。	
		長短期の留学生受入や訪日団の受入を年間複数回行い、それらを通して、異文化理解をすすめる。	3						
	英語を含む外国語の検定試験の積極的な利用啓発と生徒の検定資格の取得促進	実用英語検定、GTECテスト等の案内を各学期、複数回行い、受検者を増やす。	4	4		4	(成果) 実用英語検定は年3回、GTECテストについては年2回実施することができた。実用英語検定については回を増す毎に受検者も増えてきている。 (課題) GTECテストについては今年度初めて受検希望者を募る形で実施したが、実施の時期や方法については再考の余地がある。	今後も検定案内を徹底していく	
		検定試験の受検に伴い、対策講座や対策用教材の充実を図る。	3						
		(成果) 実用英語検定については、事前の対策講座や英語科の協力の下、二次試験対策を行うことができた。対策用の教材等は今後充実させる必要がある。 (課題) 受検者の増加に伴い、部内での対応に厳しい面がある。今後受検者数によっては、英語科の協力も得たい。	検定の対策講座については、教材の精選も含めて、内容の充実をめざしていく。						

国語科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)身に付けたい力や学習のポイントが明確になり、生徒自身による学習成果の振り返りができた。	振り返りが次の学習に繋がるように工夫する。	
	日々の授業を通しての基礎・基本の徹底	音読指導を単元毎に行い、言葉に対する感性を高める。	4		(成果)音読の時間を増やし、相互評価をすることができた。また、少テスト等により基礎学力の向上に努めた。	担当科目を越えて連携をはかる。生徒の実態に即した教材を効果的に活用する。	
		古典文法を理解させることに努め、50%以上の生徒に基礎力の定着をはかる。	3		(課題)古典文法理解の定着において個人差が大きい。		
	日常生活の中での語彙や活字に対する興味喚起	新聞教材など話題性のある教材や作品を効果的に扱う。	3		(成果)話題性のある教材や作品を扱った。また、図書室と連携し、関連教材の提示を行った。	(課題)科目間の連携を十分にはかかることができなかった。	
図書室と連携し、関連教材の提示を効果的に挙げる。		3					
授業における自己表現の場の充実	アクティブラーニングをふまえた自己表現の時間を10%設定する。	3	(成果)グループワークやペアワークを取り入れ、生徒の主体的な学習態度の涵養に努めた。	(課題)文章読解の時間確保のため、表現に当てる時間的ゆとりが少ない。	効果的な指導方法の研究と実践交流を充実させる。		
	様々な場、形式で「書く・発表する」ことで、表現の楽しさを味わい、自己表現に対する抵抗感を軽減する。	3					
地歴・公民科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)生徒の自己評価を参考に授業を改善し、生徒がより一層学習内容に興味・関心を持ち、着実に学力向上が図れるよう配慮した。	相互の授業協力・参観等を活発に行い、授業の状態を互いにチェックしていく必要がある。	
	地理・歴史・公民に対する知識理解の深化と地理的・歴史的・公民的思考力の育成	視聴覚教材の積極的な利用(年間授業時間数の10%程度は用いる)を進める。	4	(成果)パワーポイント、ビデオ、写真、図表等々の利用を進め、概ね10%程度視聴覚教材の利用は達成できた。	アクティブラーニング型授業等を実施する中で、生徒に実際に力がついているのか確かめながら進める必要がある。班ごとにレポートを提出するなどの方法が考えられる。		
		学期に一度は、図書室等を利用して調べ学習を実施し、生徒が自主的に学び、活動する機会を設ける。	3	(課題)視聴するだけで終わってしまうこともあり、その知識をアクティブラーニングへつなげる。			
	アクティブラーニングを実施することを通じた、21世紀を生きる根源的な力(キーコンピテンシー)の育成	言葉・情報・知識等を活発に活用するために、探究型・参加型学習の一環として、学期に一度は発表学習を行う。	3	(成果)調べ学習については、主体的学習の基本的な部分として積極的に進め、回数も増えた。	(課題)調べ学習は宿題が中心で、授業時間内に図書室等を使って実施することができなかった。情報処理室やタブレットを利用した授業への改善が必要。	教科内で更に研修を積み重ねる必要がある。アクティブラーニング研修を教科として実行する必要がある。	
学習仲間と関わり、協力するために単元に一度はペアワーク・グループワークを行う。		3	(成果)概ね、学期に一度の発表学習を行うことができた。	(課題)発表に至るプロセスから得ることが可能な学習成果(キーコンピテンシーの育成)を重視した。発表内容を次回につなげるサイクルに改善点あり。			
基礎・基本の充実	知識の定着を目指し(認知プロセスの外化)、レポート、小テスト等を単元ごとに一度は課し、学習状況を確認する。	3	(成果)単元に一度のペアワークやグループワークは多くの科目で実施することができた。	(課題)学習手段であるはずのペアワーク・グループワークを目的化してしまったところがあった。	授業を計画する段階から活用できる知識の習得を視野に入れて、様々な場面を想定した授業の構成を考える必要がある。生徒の興味を引き出す授業の展開、一方的ではなく、双方向性授業を目指すべきである。		
	論理力の育成を図るために、単元ごとに一度はまとまった資料を読む機会を持つ。	4	(成果)ほとんどの科目で、小テスト、レポート等を単元ごとに課し、学習状況を確認することができた。	(課題)アクティブラーニング等の実施を考慮し、活用できる知識の習得を考える必要がある。			
数学科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)シラバスに沿って学習計画を推進し、生徒たちも自己評価によって自分の理解の深さを知ることができた。	(課題)観点別評価をもう少し生徒の学習意欲に繋げ、学習内容の定着を図りたい。	
	基本的な知識の習得と技能の習熟並びにそれらを的確に活用する能力の育成	苦手な生徒には個別指導を行い、追認調査対象生徒をなくす。得意な生徒には問題集を自主的に解かせ、実力養成講座への参加を促す。	4		(成果)中間調査後の補習や、苦手生徒の取り出し補習は実施できた。得意な生徒には問題集を自主的に解かせ力をつけている。	(課題)補習対象の生徒は補習を受けることによって定期調査に一定の成果が出ているが、対象にならなかった生徒で欠点になる者が出ている。力をどどんつけている層と苦手としている層との開きが大きい。	一時間一時間の授業の中で、到達点を設定して、評価を行い、生徒たちの「できた。わかった。」という達成感を学習意欲に結びつける。
	家庭学習の習慣化	必ず宿題を提出させる。提出物の期限を厳守することや定期調査直前に学習を始めるのではなく、普段から計画的に学習するように指導する。	4		(成果)提出物の期限を細かく設定することによって計画的な学習に取り組む姿勢や期限を守ることがかなり徹底されてきたと思われる。	(課題)反面、提出物の期限が守れない生徒が固定化してくるとともに、不完全な状態で提出してくる生徒も以前より増え、その指導が課題である。	小テスト、提出物の時期と模試対策を行う時期を計画的に設定して、日頃から継続的な学習に取り組ませるようにする。
	数学的な見方や考え方を認識し、数学の美しさ・おもしろさを感じられる生徒の育成	授業に集中させ、興味・関心をもたせる教材を工夫する。身の回りの現象を数学的にとらえた教材を積極的に授業に取り入れる。また、そういった問題を解くとき、グループワークなどのアクティブラーニングを取り入れた授業を行う。	3		(成果)数学に興味・関心を持ち、難しい問題を解くときに周りの人と学び合いをするなど、意欲的な面も見られ、協同的な学習をできた科目もある。	(課題)取り上げる例題も身の回りの現象を数学的に捉えた内容が増えてきてはいるものの、一時的なもので、そこから数学への興味・関心を継続的に持たせることにはなかなか繋がっていない。	数学が得意・好きな生徒には、習熟度別授業を活かしてさらに応用的な問題に取り組んだり、個人的に声をかけてもっと難しい問題に取り組むように指導していく。
理科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)シラバスに沿って学習計画を推進し、ほぼ計画通りに達成できた。と考える。	(課題)評価規準が現行の4観点から将来3観点へ変更されることについての対応や準備は未達成である。	
	十分な教材研究に裏打ちされた、生徒が主体となる授業の充実	毎授業内で、身近な例を1つ取り上げ、関連付けを行う。	3		(成果)できるだけ身の回りの自然現象と関連付けながら授業を進めてきた。	可能な限り実験や観察の授業を導入するとともに、身近な自然現象への興味・関心を引き出し、自らスキルを高め、将来社会の中で活躍できる人材を育てていきたい。	
	各単元に対応した観察・実験による自然科学に対する興味・関心の高揚	各調査毎に最低1回の観察・実験を行う。	4		(成果)実験観察の機会を通して、生徒の自然科学への関心・理解を深めることができた。	(課題)多様な個性を持つ生徒に対応するため、事故防止などの観点から実験時に複数の教師が入る必要性を感じた。	変化し続ける入試制度や入試問題の研究に努め、的確な助言・指導が行えるよう努めていきたい。
	理系学部進学希望者の進路実現	個々の生徒が必要としている情報を厳選して集める。入試問題を研究し、入試に対応できる実力の向上を図る。	4		(成果)国立大学や関関同立等への進学希望者を育てることに一定の成果はあったと考える。	(課題)進学希望者の安全志向が強くなっており、粘り強く最後まで努力させることの難しさを感じた。	
保健体育科	運動に主体的に取り組む体験による生涯にわたって運動を継続する力の育成	1・2年生の授業でグループ学習、2・3年生についてグループノートの内容の充実を図る。運動に主体的に取り組む体験を通して、生涯にわたって運動を継続する力を身に付けさせる。	4	4	(成果)グループ学習において、生徒同士の話し合いの機会を設けたり、グループ毎のノートや個人の学習シートによって、課題や問題点を見つけ出し、課題解決方法を話し合いの中から見つけさせることができた。生徒自身が授業を振り返ることにより、生徒の習熟状況に合わせて指導を行うことができた。	教師主導型の授業から、生徒自身が主体的に取り組む授業形態を多く用いる。評価基準や評価方法を生徒に示すことにより、毎回の授業において、どのように評価しているのかを、明確にする。	
	運動の合理的な実践による健康の保持増進と基礎的体力の向上	体調に応じて運動量を調整したり、仲間や相手の技能・体力の程度に応じて配慮できる能力を育てる。体育理論では、スポーツの意義や歴史、文化的特徴の理解およびスポーツに対する意識の向上を図る。	3		(成果)年間を通して、準備運動や補強運動を継続し体力の向上に努めることができた。	思考・判断や知識・理解の評価においては、学習カードやグループノートを活用させることで、生徒の実態把握と生徒の課題解決の手立てを示す。	
	健康と安全について理解の深化並びにそれらを改善・維持・管理する力の育成	生き生きとした社会生活を送るために必要な健康に関する知識を習得する。生涯にわたって健康に生活するために、生活習慣の指標を身につけさせる。応急手当やAEDの使用法を含めた心肺蘇生法の手順を身に付けさせる。	4		(成果)生涯の各段階における、健康課題に応じて、自らがこれに適切に対応するために、健康に関する知識を活用・実践できるよう指導することができた。	体育理論の授業内容を充実させ、生徒間の意見交換などを行い、生涯にわたってスポーツに取り組む態度を育てる。	
音楽科	様々な音楽における興味・関心・意欲を養わせ、幅広い音楽における鑑賞能力を高めさせる。	古今東西の幅広い音楽にふれる中で、自ら様々な音楽活動に取り組む姿勢を身に付け、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育成するとともに、より一層深い鑑賞能力を育成する。	4	4	(成果)全体的に多くの生徒が様々な音楽活動に意欲的に取り組んでいた。	すべての生徒が意欲的に音楽の諸能力をバランスよく向上させていけるように、授業展開に工夫をしていきたい。	
	音楽における豊かな表現力や独自の創造力を高めさせる。	読譜力を高めるとともに、幅広い歌唱・器楽演奏活動を通して、表現力をさらに高め、また、自ら音楽を創造する能力を育成する。	3		(成果)音楽科における基礎基本となる諸能力を身につける時間を確保しながら、生徒個々の演奏能力や表現力、創造力を高めるような授業を展開したい。		

美術科	見る・描く・作るの基礎を身に付け表現する喜びを体験させながら、様々な美術作品に関する知識を身につけさせる。	デッサンの基礎能力を身につけて、画材・用具の多様な表現力をつけさせる。美術史上の画家や、その生涯と作品について知り、名画の鑑賞能力を身につけさせる。	4	4	(成果)手、人物、静物をデッサンすることで、鉛筆、ペン、水彩、アクリルガッシュ、版画等、様々な画材の用具を使い、その特徴を生かした表現ができた。 また、美術史を学び、11名の画家の名画や人生、時代背景を紹介することで、生徒は興味を持ち、熱心に学ぼうとする意欲が感じられた。作品制作には学習意欲が大切なので、より伸ばしていく必要がある。	芸術は才能に恵まれた者のものではなく、自分の思いを表現することであるということを体験し、楽し制作している様子も見られるので、作りたい思い(自発性)、表現の追求(自主性)、完成の喜びと意欲(主体性)を伸ばしていきたい。	
	美術を愛好する心情を育て感性を高めさせる。	それぞれの個性を認識させ、それを活かす方法を考えさせる。	3		(成果)4つの自画像では、自己の内面を抽象画にしたり、カレンダー制作や色彩構成絵本制作においても、それぞれの個性を生かした表現ができた。		
書道科	書の歴史を学び、名品名跡の鑑賞力を身につけさせる。日常における書写能力を身につけさせる。	できるだけ多くの名品名跡にふれ、古典臨書にじっくり取り組ませる。実用的な書に取り組みさせる。生活の中の様々な書に目を向けさせる。	4	4	(成果)多くの古典作品にふれることで、臨書、鑑賞を中心に学習を進めることができた。漢字仮名交じりの書では、自分なりの創作にも取り組んだ。ペン字やのし袋の書き方、様々な書作品を紹介することで、書が身近にあることを認識できた。	個人の能力の差が大きいので、個に応じた対応を心がけつつ、それぞれの表現のよいところを引き出せるような指導の工夫をしていきたい。	
	書美を表現する力を身につけさせる。	古典臨書を通じて様々な表現技術を身につけさせる。作品制作に意欲的に取り組ませる。	3		(成果)各古典による特徴の違いを自分なりに意識し、表現しようとしていた。篆刻では、小さな石の中で表現される美の世界を理解し、創作できた。		
英語科	より良い評価方法の確立	シラバスやCAN-DOリストを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	3	4	(成果)シラバスを活用し、生徒自身の自己評価をさせることができた。 (課題)CAN-DOリストの積極的な活用までには至っていない。	CAN-DOリストの活用について教員で話し合う機会を設ける。	
	4領域(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく学び、生徒が英語に興味・関心を持つような指導の工夫	定期考査や授業を通して、生徒の4領域の学習度合いを測る。また、課題や小テストを定期的に行い、到達度を把握し、きめ細かい指導を行う。	3		4	(成果)指定研究の機会を活用しながら、4技能の活動をバランスよく行う授業のあり方を研究することができた。検定受験者に関しては受験者を大幅に増やすことができた。GTCEは4技能の検定型を実施することができた。 (課題)英語表現の授業や考査で、4技能をバランスよく伸ばし評価するのは容易ではない。	普段の授業や考査の中で、とくに「聞く」「話す」領域の活動、テスト、評価の具体的な方法を教員でさらに模索していく。
		国際教育部と連携しながら実用英語検定の指導に努める。	4				
		CTを活用するなどしながらリスニング力やライティング力の向上に努める。	4				
	リーディング力向上に必要な語彙力や文法力の定着	教科書、補助教材を活用し、最低でも毎週1回単語テストを行い、語彙力の強化に努める。	4		4	(成果)定期的な単語テストを継続して実施することができた。各学年で実力養成講座を実施し、さらなる読解力の強化に努めた。 (課題)単語テストで培った語彙力が読解の中で生かせない現状である。	文章の中で語彙力をつけることができるよう授業を工夫し、テストのための勉強ではなく、より定着を目指した学習方法を生徒に提示していく。
		リーディングの基本となる単語については、1年生で2000語、2年生で3500語、3年生で5000語の習得を目指す。	3				
1年生は少人数編成による講座の実施により文法力の強化を目指す。また2・3年生では実力養成講座等で生徒のニーズに応じた指導を目指す。		4					
家庭科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)4観点のバランスがとれるような評価計画を立てて実施した。シラバスを活用し、生徒自身にも学期毎に自己評価をさせることができた。 (課題)生徒自身の興味・関心、知識、技術に差があるので、実態をできる限り把握する必要がある。	教師主導型の授業だけでなく、双方向型授業を多く取り入れていく必要がある。	
	人の一生と家族・家庭及び福祉・衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術の習得	学期毎に2回はタイムリーな話題を取り入れ、実生活との関わりについて理解させる。	4		4	(成果)各分野毎にタイムリーな話題をできるだけ取り入れ、実生活との関わりについて理解させた。 (課題)授業で身につけた力を、今後どのように実生活に生かしていくか考えさせる必要がある。	タイムリーな話題の提供だけでなく、実生活とどのように関わっているか、今の自分にはどんなことができるかグループワークなどを通して考えさせる。
		基礎的・基本的な知識と技術を身につけさせるために、実習や演習などの体験学習を効果的に取り入れる。	3			(成果)実習や演習を取り入れ、体験学習を行った。 (課題)実習や演習を取り入れられなかった分野もあった。また、生徒の生活体験が少なく、道具や器具の扱いに多くの時間を費やすため、実習時には、補助に入ってもらえる教員が必要である。	生徒の実態に合った教材や学習方法をさらに精査していく。
		主体的に学ぶ力をつけさせるために、グループワークなどのアクティブラーニングを取り入れた学習を行う。	3			(成果)グループワークやアクティブラーニングを取り入れた単元では、お互いに教え合ったり意欲的に取り組む場面が多く見られた。 (課題)各分野で1～2回程度は取り入れていく必要がある。	生徒の実態に応じた内容でアクティブラーニングを行う。グループで協力して意見をまとめさせ、グループとしてレポートを提出させる。
	観点別評価を取り入れるとともに、生徒の自己評価表を活用し学習効果の向上に努める。	4	(成果)被服実習では、毎時間の進捗状況・できばえについて、調理実習では実習ごとに反省・感想などを記入する自己評価表を取り入れた。 (課題)生徒一人一人で「できた」という評価には、差が出てくることがある。		ルーブリックを活用し、評価をよりわかりやすいものに工夫する。		
家庭や地域の生活課題を主体的に解決する実践的な態度の涵養	ホームプロジェクトに取り組ませる。学校家庭クラブ活動を充実させ、参加させる。	4	(成果)夏期休業中に実施したホームプロジェクトを文化祭で展示した。それぞれが興味・関心のある内容で取り組むことができた。家族の協力を得たり、学習を各家庭にも広げることができた。校内・校外において予定していた家庭クラブ活動は滞りなく行うことができた。 (課題)個人で取り組んだホームプロジェクトの発表を授業で行う必要がある。	ホームプロジェクトの発表は、6～7班に分かれてグループで行うなど生徒の実態に応じた取り入れやすい方法で考える。			
情報科	より良い評価方法の確立	シラバスを活用した観点別評価を導入し、生徒一人一人に応じた学力の向上を図る。	4	4	(成果)4観点のバランスがとれた評価ができた。また、授業ごとに自己評価シートを用いて自己点検を行った。 (課題)教科書の内容に関して、その知識が社会のどのような場面に活用されているのかも合わせて考えさせ、理解させる必要がある。実技に関して、タイピングなど生徒によって能力が大きく異なり、実技の時間を十分に確保できなかった。	知識理解に留まるのではなく、身につけた知識能力を社会で発揮できるような授業展開を考える。タイピング能力を最低限補充するような時間をつくる。	
	情報機器を問題解決に効果的に使える能力の育成	プレゼンテーションソフト、表計算ソフトを使用する実習を行う。教室での教科書をベースとした授業と情報学習室での実習の授業を行う。	3				